



食べ過ぎて起こる血液の汚れ

現代医学者の多くは、遺伝子などミクロの分子生物学まで遡ることがもともと「医学」らしいと考えます。また、そこまで探ることこそが現代医学の真骨頂とも言えます。しかし、一般にそこまで遡らなくても多くの病気の原因は案外簡単なところにあるのです。逆に、進み過ぎた現代医学では見えづらくなっているものがあります。口から取り入れられた食物は、咀嚼(そしゃく)、唾液の分泌、胃腸での蠕動(ぜんどう)やさまざまな消化液の分泌など機械的消化と科学的消化を受けます。その後、胃腸から吸収されて必要な栄養素(たんぱく、脂肪、糖分、ビタミン類、ミネラル類...)に分解され、血液によって脳、心臓、肺、皮膚、骨、子宮などを構成している60兆個(現在は37兆個説が有力)の細胞に供給されます。

栄養素の燃えカスは、死んだ細胞などとともに老廃物として再び血液に戻されます。そこで水に溶ける老廃物は腎臓でろ過され膀胱から尿として排出されます。水に溶けない老廃物(アルコールなど油性、揮発性のもの)は腸から便として、また肺から吐く息として排出されます。現代医学には「血液の汚れ」を中心に考えることはありません。しかし、我々は、普段の生活の中でも、「血液の汚れ」を実感することがあります。誰しも朝、起床した時、吐く息が臭い、目やにが溜まっている、尿の色が濃いなどを経験しているはずです。これは血液中の老廃物、有害物の排泄現象が旺盛である証拠なのです。朝は、血液を濾過した結果、体のあらゆるところから不要なものを排出する時間なのです。これが自然医学でいうところの「血液の汚れ」の浄化作用です。

一晩だけではなく、数日ないし1週間の断食をすると、吐く息はもっと臭くなります。舌の上に厚いネバネバした舌苔(ぜったい)(舌の表面に表れる苔のような付着物)がくっついたり、鼻汁や目やに、帯下(たいげ)(女性のおりもの)が排泄され、どす黒い宿便、濃い痰や濃い尿も出てくるなど、まさに「排泄現象のオンパレード」です。

こうした目やに、鼻汁、小便、汗、口臭などの実体は何でしょうか。「断食」によって体内に蓄積されていた糖、たんぱく質、脂肪または病変細胞を再利用したあとの燃えカスです。つまり、各臓器に余分に蓄えられ、血液を汚していた原因物質を利用しつつ、体の様々な排泄口を介して出てくるものなのです。断食した人は、皆一様に「自分の血液が汚れていた」ことに気付きます。「吸収は排泄を阻害する」という人体生理の鉄則があります。この鉄則は「食べれば食べるほど排泄は悪くなる」ことを表しています。食べれば、それを消化吸収するために胃腸はたくさんの酵素、血液を必要とし、胃腸に集まります。その分、排泄をつかさどる臓器(大腸、腎臓)へ行く血液は相対的に少なくなり、当然、排泄力は落ちます。逆もまた真で「食べなければ排泄はよくなる」のです。

血液が汚れると、全身の臓器にありとあらゆる症状が発現してくることがわかります。しかし、こうした「血の汚れ」の極限状態に至る前に、人体は血液の浄化をするために次のような反応を起こします。これこそが(自然治癒力)というべきものです。

食中毒菌などが口から胃腸を通して入ってくると、人間の体は胃液や腸液、膵液を多量に分泌して、こうした毒を薄めるとともに、嘔吐や下痢で排泄しようとし、下痢止めや吐き気止めが著しい効果を表すケースでは、かえって食中毒による死亡率が高まることがあるとされています。

①食品添加物、着色料 ②野菜、果物、米などに付着した残留農薬 ③化学調味料 ④化学薬品 ⑤動物性食品を食べ過ぎた結果できるアミン、アンモニア、スカトール、インドールなどの有害物は、腸から吸収されていったん血液に入ってきます。しかし、血液の中の免疫細胞である白血球が有害物質であると判断すると、いくつかの方法でそれらを攻撃します。

現代医学では、炎症の原因は病原菌なので、抗生物質を使って病原菌を殺す治療に専念します。細菌をはじめとする「ばい菌」は、地球上の余ったものや不要なもの、死んだ者などを分解して、土に戻す働きをしています。だからこそ、ばい菌はどぶ川、ゴミ溜め、糞尿の中、死体の上など「汚いところ」に多く存在し、せせらぎやきれいな海の中にはほとんどいないわけです。

体内でも同じことが考えられます。ばい菌により気管支炎、肺炎、膀胱炎、胆のう炎などの「炎症」が起きるのは、その人の体内や血液が汚れているからなのです。「ばい菌は、体内・血液内の汚れを燃焼・浄化するために、わざわざご親切にも体内に侵入してくださるもの」です。例えば、漢方では炎症が起こった時「葛根湯」を処方します。葛根湯にはばい菌を殺す作用はなく、体を温め発汗を促して体内の老廃物を水分といっしょに体外に排出する作用があります。つまり、ばい菌が入ってくる必要のないキレイな血液をつくるわけです。